



Title	臨床心理学専攻大学院生(30才, 男子)のロールシャッハテスト解釈
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 1982, 58, p. 77-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80907
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

臨床心理学専攻大学院生 (30才, 男子)
のロールシャッハテスト解釈

氏 原 寛

An Interpretation of the Rorschach Test of a Clinical
Psychology Major Graduate Student (Male, 30 ys)

Hiroshi UJIHARA

The author presents an interpretation of a clinical psychology major graduate student (male, 30 ys). The interpretation aims at judging the aptitude of the subject as a psychotherapist. Although the task is difficult, the author is under the impression that something can be said about his future potential as a therapist.

The most characteristic feature of his as seen from this test is flexibility of ego-boundary. It is helpful in a therapeutic situation, whereas under more realistic circumstance he cannot trust in others enough to enjoy satisfactory relationships with them. Even in a therapeutic situation he may at times identify himself too much with his client to keep necessary distance.

His task for qualifying himself as a therapist is, the author thinks, to integrate further his subjective world and objective world.

はじめに

今回は、臨床心理学専攻の30才の男子大学院生のプロトコルを示したい。本人はすでに臨床活動も行っている。このテストのねらいは、被験者の心理治療家としての適性を評定することであった。それが可能なことであるのかどうかは問題である。しかし一応の見通しはもてるのではないかと、というのが解釈後の筆者の印象であった。

なおプロトコルは、筆者を中心とするロールシャッハセミナーに提供される前提のもとでとられたものであり、被験者も、このテストについてまったく知らないわけではない。そこに若干の歪みの入りこんでいる余地がある。しかし、一つのプロトコルから被験者の人間像をどのように捉えてゆくかを示すのにとくに支障になるとも思えないので、あえてとり上げることにした。

1. プロトコルとスコアリング*

I カード 5秒 △ 何か魔女っていう感じ。これ (d₃) が手で、頭が二つやから二人の魔女みたい。これ (D₅) は何か魔女の羽みたい。二人の魔女でもあるし、頭のない一人の魔女みたいでもある。何か化石の頭のようにも見える。これ (下方のS) が目でこれが頭骸骨。恐竜の頭骸骨。ダンスしている二人の男の人。ここ (d₄) に顔があって、これ (d₁) が手でこれが足ですね。ここは手をつないでいる感じ。やっぱり魔女の印象が一番強い。足があって、スカートがあって胸があって、ここ (首、頭) の感じで二人とも一人ともつかない感じ。羽のような服が大きく広がっている感じかな。そんな所ですね。2分35秒。

〔質疑〕 (魔女) 魔女は全体。これが手。ここ (d₅) は頭でもあり首でもある。頭としたら二人。首としたら頭がない。(化石の頭) こっちの方が目。全体が骨。頭骸骨。(化石) 恐竜の骨という印象。恐竜の頭骸骨。(ダンスしている二人の男) これが頭。手。足。足はこうまげて (d₂ のあたり) こっちはのばしている。一本の後の方の足で、こっちは前の方に曲っている。これ (下部Sの上縁) が着物の裾。ロシア人の踊りみたいな感じもする。(手をつないでいる) これ (D₆ の下部) が後へのばしている手。これが前の方の手。そこをつないでいる感じ。

1. W F (H) -0.5

二人か一人かで全体のゲシュタルトがかなり変化するはずであるが、それについての言反がない。マイナスの明細化と考えるべきであろう。

2. WS F AAt 1.0

3. W M H 3.0

顔とロシア人と結合に付加点を与えられる。

II カード 13秒 △ 何か最初は赤いのが印象的で、血がパーッと散ってしまうような感じがしたけど。殺人現場の跡。黒い方の感じは二匹の熊が手を合わせて踊っているみたい。赤いのも一緒に見てみると、二匹の鳥の頭ですね、赤いのが。とさかがあって目があって口を開いてて、それで手を合わせて踊っている。下の赤い部分はかぶとがにみたい。赤なしで、二匹の熊の小父さんが神への儀式の踊りとか舞いを舞っている感じ。パッと手を合わせて。みればみる程そんな感じにみえてくる。以上です。3分23秒。

〔質疑〕 (血がパッと殺人現場) これ (D₁) がピチャーと散っててここ (D₂) はベタッとついているという感じ。(殺人現場というのは) 血だけ。血が散っているという感じ。(黒の方は熊) ここが頭。これが手。手を合わせている。こっち (d₄) が後側にいつている手。こう、こういう感じですね。こう、こうきているわけです、手が。ここに頭があって。そしてこれが足。ぐっとまがって、それでこっち向きに二つの足がこう、しゃがんでいる感じ。こうやってしゃがん

* スコアリングは主に Klopfer (1962) によっている。

でいる。(熊というのはどんな所から) 頭の感じ. 頭と体の感じがこう. 腕の感じもこう. 擬人化された熊という印象. (赤いのと一緒にしたら) 形はまったく一緒に, 今度はこれが肩, 肩というか首というか. これ (D₂) が頭になって. ここが目, この薄い二つの上の方が目. キュッキュッと出ているのが唇, くちばし. くちばしが開いている感じ. その下のこれがほっぺた. 下の白いのが. これがとさか. (あとは手と手を合わせているわけね) あとは熊と一緒にです. (かぶとがに) この赤いところだけ. (かぶとがにというのは) 形から. (神への儀式の踊りというのは熊と一緒に?) はい.

1.	D	CF, m	Bl	0.5
2.	D	M	A	P 2.5
3.	W	M	A	3.0

くちばしと目と結合に付加点を与える. しかし体の部分は2と同じであり, 頭の部分の変化が全体のゲシュタルトを変えるには至っていない. 二つの反応であるが, I-1 に似たうけとめ方である.

4.	D	F	A	1.0
----	---	---	---	-----

III カード 3秒 ハ パッとみた瞬間は餅つきにみえた. これは二人の土人が何か穀物をついているみたいな感じ. で, 両側の赤いのは火の玉が飛んでいるみたいな. まん中は赤い不気味な蝶々という感じ. 何かこれは土人というよりも鳥人. 鳥と人間のあいの子みたいな. あいの子というとおかしいな. 伝説上の鳥人間みたいな感じかな. この世でない世界の, 別世界の鳥人間のお餅つきという感じかな. 餅つきの臼は人間の骨盤みたいな感じやな. 2分7秒.

[質疑] (二人が餅つき) これが顔. 手. 足. 臼. (二人の土人) おっばいがボンと出てお尻がボンと後へ出てという姿. これがアフリカの土人を連想した. (そしたら, おっばいが出てるんやったら女ですか. 男ですか) そういう意味では女という感じ. 別に意識はしなかった. それよりも何か鳥人と思った方がピタッとくる. (土人より) はい. (両側の赤い) これが火の玉. これが蝶々. (このまん中の赤い不気味な蝶々というのは) 赤いんで. (はあ, 色が) はい. それと火の玉と一緒にってそういう感じ. 何か今見たらこの鳥人にこう, 何かささやきかけているみたいですね, この火の玉が. (火の玉が) はい. 火の玉か, 火の玉の恰好をした何か, やはりこの世のものではない妖怪ですね. (妖怪ね. それから臼が人間の骨盤みたいと言わはったね) 形が. (形がね)

1.	W	}	M	(H), At	P 2.0
2.	D		CF, m, M	Soul	0.5
3.	D		FCsym	A	P 1.0

IV カード 7秒 ハ これは鼠の開きですね. 鼠を解剖してみたい. V 逆さまにしたら変

な虫に見える。磯にいる海牛とかそんなものがモゾモゾ動いている感じ。逆さにみた方が面白い。まっすぐみるとやっぱり鼠の開きというのが。はい。1分51秒。

〔質疑〕（鼠の開き）これが頭で、これが手で、これが足で。（鼠というのは）何か全体の印象がっていうか、頭のへんですね。半分から上の印象が鼠の感じがあった。（ひっくり返して変な虫に見えるというのは？）海牛みたいな。それからここ（D₁）が頭で、で、このまん中の感じが海牛のような感じ。（この方向が）はい。それを中心に全体がこういう変なかつこうの不気味な虫という。ここ（d₄）が虫の口にみえたのでひっくり返してみたくなくなった。ここだけが口。これが目。

1.	W	F	AAAt	1.0
2.	W	FM	A	1.5

V カード 4秒 A パッとみて蝶々。悪魔のようでもある。あげは蝶と悪魔を一緒にしたような感じ。黒あげはですね。これはそれ以上イメージがわかりません。1分。

〔質疑〕（また今みて何か思いついたら言ってもろてよいんですよ）はい。（これが蝶々）これはもうパッとみて。ここが頭。あとは羽。あげは蝶は羽がピコッと出た所があるでしょう。ここ（d₂）。（悪魔のようというのは）これが頭で、角で、足。これが股。股というか羽というか。服兼羽ですね。何か下へこうパタンと垂れているので、あげはよりも蝶々よりも悪魔という。（それだけやったね。ここは）

1.	W	FC'	A	P	2.0
2.	W	F	(H)		1.5

これは質疑のやり方によっては一つの反応になったかもしれない。質疑には他にも若干問題がある。しかし部分の差を指摘しながら、主要部分はそのままするのはこの被験者の癖のようではある。

VI カード 15秒 うーん。これは何でしょう。上の方は猫の頭みたい。パッとみた瞬間はギターみたいな楽器を思ったんですけど。これはつぶされた猫という感じが強いな。まん中ピーンと登ってくるのが背骨という感じ。背骨がずーっと通って脳みそまでいってる。まさしくグシャッとつぶされた猫ですね。2分10秒。

〔質疑〕（これは猫の顔）猫の、つぶされた猫ですね。ここが顔でこれが手足ですよ。（猫）背骨がずーっとのびてこれが脳みそに見える。（これが猫というのはどんな所から）その、この薄いやつ（D₅）が猫のひげですね。これが、この二本の。これが口みたいな感じ。これが顔。ほった一杯のもじゃもじゃひげ。だから猫という感じですね。（大体猫というのはこの感じから）はい。（ギターは？）ギターですね。これがまあ、あの、ギターの頭ですね。これが胴体。これが竿。ギターというか三味線というか。

1.	W	Fc	AAAt	2.0
2.	W	F	Obj	1.0

VII カード 3秒 これは象さんの踊り。象さんにはやさしすぎるかな。二人の女の子が踊っているのかな。今はどちらも背中合わせで。顔が中を向いている。ぐるっとひっくり返って首だけ中を向けているというふうに見たら、猿が踊っているみたいですね。着物は日本の着物の感じですね。そんな所です。1分50秒。

〔質疑〕（象の踊り）パッとみてここ（ d_2 ）が鼻にみえたんで。象の鼻ですね。余りにもスマートやから、これは。（鼻やったらどっちがどう向いてる）外を向いてる。どっちも。鼻がこうあって。頭。こっちが口。（ここが口になるわけ）はいはい。（象さんいうのはどのへんまで）もうこれで象。全体が象。二匹の象が踊っているというふうに見えた。（フンフン。この鼻が特徴なのね）はい。そやけどいくら何でもやせすぎているから、象よりも鼠みたいな感じかな。非常にスマートな女の子か、というような感じ。（女の子やったらどうやって）これ（ d_2 ）が手。これ（ D_2 外側突出部）も手。鼻が手で。顔。腰。スカート。スカートというか羽織袴という感じ。手は猫の手という感じもある。（これはその、女の子が踊っていながら猫の手みたい、ということ？）はい。そやからあのおう、最初象がみえて、その次にやせた象という感じの時に猫の手という感じがした。（それから猿が踊っている感じというのは）これを今度、体が外を向いているけど顔だけふり返って中を向いているというふうに見たら、ここが口でこのひっこんでいる所が目でお猿さんの顔。口と鼻と目。（お猿さんというのはここから？大体）はい。だから猿が踊っているという。（顔の感じですね）それやとまあ細さもこれでよいなという感じ。お猿さんがひょうきんな踊りをしているという感じ。（女の子やったら日本の着物を着てるんやね）はい、お猿さんでもです。（あ、お猿さんでも）はい。着物を着たお猿さんです。羽織袴のお猿。（女の子でもそんなんやな）はい。象でもそうです。全部とに角。（あ、象さんもやっぱり着物着てるの）はい。着物着てるわけです。それはもう最初からの印象です。（ああそうか。みんな着ているのは羽織袴ね）はい。（羽織袴は何で）これが紋付きっていう感じ。紋（ D_2 中央の薄い点）ですね。これが袴の足の感じですね。

1.	W	M	A	2.5
鼻と運動と結合にそれぞれ付加点が与えられる。				
2.	W	M	H	2.5

この場合は鼻に代って紋付の綾に付加点が与えられる。ただし次の反応も含めて、質疑のやり方によっては反応数をもう少し絞れたかもしれない。なお紋は3つの反応に共通であるので、この反応でのみカウントしておく。また猫の手は独立した付加反応とみるべきかもしれないが、質疑がそれをあいまいにした。もし女の子の手が猫の手なのならば、マイナスの明細化になる。

3.	W	M	A	3.0
----	---	---	---	-----

目と鼻に付加点が与えられ、後は1, 2と同じである。

VIII カード 20秒. 何か上の灰色のが二匹の狼で、外側の赤いのがいたちみたい。ここ (D₅) の所、顔にもみえる。年とった男の人の顔。全体花のようでもあるが、花としたり汚い花やな。ここん所 (D₂) は二匹の背中合わせの熊という感じ。手が出てて顔が上を向いていて。熊といたちと狼が輪を描いている。まん中の青いのは何か破れこうもりの死骸みたいな感じ。羽をひきちぎられたこうもりという感じ。そんなとこです。3分13秒。

〔質疑〕これはパッとみてこれ (D₃) が狼にみえた。顔がこっち、中の方向いて。これ足。(これが顔) このへんが頭です。二匹の狼の頭。(こっちとこっちで二匹いるわけ) はい。(ここが頭ね) はい。何かこれが頭で、このへん全体が頭の感じ。もっと大きくこの位が頭。(これが足。ここまで) 足が三本みえているというか。(これも、ね) どこがどうという感じではなく、とに角足という感じ。これがいたちの頭。(いたちは。ふーん。いたちがいて狼さんが出て。いたちというのが) 頭。足。しっぽ。しっぽとも足ともつきませんが。(他のものでなくいたちになったんでしょ。これが) はい。(年とった男の人の顔) これですね。この白い三角。(何で年とった男の人の顔かな) しわが一杯あって目が垂れているという感じで。ガリガリにやせていて。全体にたるんでいるという感じですね。年とってたるんできた。やせて。(全体が花のよう。花やったら汚いやつ) はい。ここ (D₇) がこう、これががくでこれ (D₁) がはなびら。こんなんがついているから非常に汚ない感じ。(これががくになるわけ) はい。このだいたい色の所ががくですね。この色の違う所 (D₃, D₄) が汚ない。(この汚ない花はそやけど何の花みたいかな) ふーん。何でしょうか。ふつうの赤い花というか、五枚くらいはなびらのある。(熊) 鼻。口。頭。手。六匹の動物を描いているという感じ。(これはなし) まん中が破れこうもり。(破れこうもりの死骸みたいってね) はい。こうもりが破れているみたいな感じ。(破れているというのは) 羽がもつとこうグワーッとあるのに、これ、あもう、ちぎれてしまっているという感じがする。(羽の形やね) はい。羽がちぎられているという感じ。(これでしまいですね)

1.	D	}	F	A	1.0
2.	D		F	A	→ P 1.0
5.	D		FM	A	2.5
3.	D		F	Hd	2.0
4.	W		CF	Pl	0.5
6.	D		F	A	1.0

IX カード 15秒 何かこれは全体が一つの顔の感じかな。まん中の穴のあいてる所が目 (d₂ の中 2つ) で、何か角のあるような頭で、赤い頭ですね。それから緑色の所がほっぺたみたいで、下の赤い所のまん中のやつは鼻の穴みたいな感じですね。ん。あるいはこの赤い所が首で、これ

が赤い服で、凄い顔をした女の人という感じかな。顔をしてお面をかぶった。それから怪物の女性かな。それから青い所だけやと外側を向いた何ともいえない変な顔をした、変な顔という感じ。漫画の動物の顔という感じかな。何か青いのがびんでそこから上へブワーッと炎が吹き出している感じもしますね。そんな所です。3分15秒。

〔質疑〕（顔の感じというのは）これが目です。これ（D₅）は大抵こう象の骨の感じ。（このへんに）はい。この、薄いし。（薄い感じね）はい。それからこれが、全体がこう仮面という感じ。（象の、うーん、この全体がですか。これが仮面）はい。仮面という感じもした。（何の仮面みたい）わけの分らん仮面。それが凄い、こうグロテスクな仮面をかぶった女の人というのが後からの、あとは一番強い印象。（それも同じ所）はい。これ（D₆を除く上全部）がグロテスクな仮面。これ（D₆）が服。これが首。服の首があって肩の丸いのがあって。華やかな服という感じ。（これがついているから女の人という感じになるわけ）はいはい。そういう事です。これはこう、気位の高い貴婦人の着る服という感じですね。（で、青い所だけは変な漫画の動物の顔）これが目、これが鼻、この小さい所が口。そうするとこう何ともつかない珍妙な。（それから炎）こっからブワーッと炎が吹き出しているわけ。この口から。びんの口から。（それ位やったかな）はい。

1. W FC, F/C Mask, Hd 2.0

顔、仮面、怪物と三つの反応の関係が明らかでない。質疑が不十分なためであるが、それがこの人の反応の特徴でもある。感じからいって一つの反応とみたい。服の首と肩の丸みに付加点を与える。目、鼻の穴、角には与えない。

2. D, S F (Ad) 1.5
 3. D mF, cF Fire 0.5
 add. 1. (DS Fc AAt 1.0)

X カード 5秒 これは何か妖怪の世界の感じ。上のまん中の灰色のやつ（D₄）が、この、二匹の何か。ばいきんというか。漫画のばいきんの顔みたい。足。しっぽ。角。口。目。それが何か長い棒もっている。外側の青いやつは、これは又別のかっこうをした妖怪で、大きな口、鋭い目、角、沢山の手足という感じ。赤い長い（D₉）は、この妖怪の女王。まん中のこのぶん（D₆）は、これはやっぱり又別の妖怪。目。口。手。足。何か妖怪の女王にダダをこねている感じ。この中の黄色い（D₁₀）のも又別の妖怪。赤い大きな目、角、手と足。この下の緑色のこれも二匹の妖怪。これは芋虫状の妖怪。芋虫とえびのあいのこみみたいな妖怪。ここの濃い所が目。この外の下の方の赤茶色のやつ（D₁₁）は海牛みみたいな感じの妖怪。上の青い妖怪はこの緑色の扇子もっているようでもあり、別の妖怪が青い妖怪の鼻の上に乗っているようでもある。角があって手を前に出している。妖怪の饗宴ですね。何かまん中の赤いの（D₁₂）が音楽を表わしている。リズムを。妖怪が楽しく宴を開いている。踊っている。そしてこの妖怪すべてが集って、一つの妖怪の王様の顔になっている感じ。以上です。4分31秒。

〔質疑〕（妖怪の世界. 全体が妖怪の世界ね. これが）これがばいきん妖怪です. これも別の形の妖怪.（青いのがね）はい.（これは何妖怪か分らない）はい. 何ともつかないですね.（で, これが扇子をもっている）はい. 扇子でもあり別の妖怪でもある. 角があって顔があって手がある. 手はちょこっと.（この赤い所が女王さん. 女王さんというのは何で）妖怪の女王というのは色の印象ですね. 色から. 色と大きさ. 一番大きいっていうのと. それ (D₁₀) が女王にとりついている赤ちゃんという感じ.（これは芋虫さんやったね）はい. 芋虫とえびの合いの子です.（えび）背中が曲っているのがえびという感じ. ここの黒い部分が目. 色の濃い部分.（海牛）これ.（海牛というの）これが背中です. ここが顔. これが足というか下のもぞもぞ動く所.（妖怪の饗宴というの）妖怪がぎょうさんぎょうさん集ってて, 楽しそうに何かこう踊っているというのか.（ああ, リズムがあって）それが音符.（全部で王様の顔というのはどういうわけ）これ (D₉ と D₈ の間の S) が目. これ全体がこう, 顔. それからこの青いやつ (D₈) は鳩妖怪という感じ. 鳩の妖怪. これが後にいる妖怪.（これも何やあったね. ダダをこねているやつ. これは）はい.（これはこれもついているわけ？）いえ, 黄色いのは関係ない, というかしっぽの続きみたいでもあるし, 関係ないみたいでもあるし, よく分かりません.

1.	D	}	M, FC'	(A)	1.5
2.	D		FC	(A)	1.5
6.	D		FM, FC	(A)Obj	-0.5
3.	D		FC-	(A)	-0.5
4.	D		M	(A)	1.0
5.	D		FC	(A)	1.0
7.	D		FC	(A)	1.0
8.	D		FC	(A)	1.0
9.	D		F	Music	1.0
10.	WS		F	Hd	1.0
add. 2.	(D	FC	(A)	1.0)	

妖怪とはどんな形でもとれるから非定形である. しかし, 部分的に目や口や角の指摘があれば定形となる. また, たとえば1.で「灰色のやつ」といったいい方は,「灰色の部分」として単に領域を示すというよりは,「灰色の妖怪」という意味であろう. 以下それに準じ, 色彩を使用したものと判断した. また, 全体としては妖怪の饗宴であるが, 一つ一つの妖怪の反応としての独立性は高く, いずれも主反応とした. add. 2. については, 質疑段階ではじめて出たものであるので付加反応とした. 6. は, D₁₃ の部分を扇子でもあり妖怪でもあるとし, 軽い混交反応の傾向がある. それをマイナスの明細化ととった. 3. の FC- も, 赤が女王を意味するという説明をマイナスにとったものである.

量的整理 R:38 T:25'55'' T/R:42'' T/R_{1c}:7'' T/R_{1c}:11'' VIII, IX, X%:49 W:17₊₁
D:21₊₂ S:₊₄ M:9₊₁ FM:3 m:1₊₂ F:13 Fc:1₊₁ FC:7₊₂ F/C:₊₁ CF:3₊₁ H:2 (H):3
Hd:2₊₁ A:12 (A):7₊₁ (Ad):₊₁ At:₊₁ AAt:3₊₁ Pl:1 Fire:1 Bl:1 Obj:1₊₁ Music:1
Mask:1 Soul:1

Rejection:0 M:FM=9₊₁:3 M:FM_{+m}=9₊₁:4₊₂ F:FK+Fc=13:1 FM_{+m}:Fc_{+c}+c'=4₊₂:1
Fc_{+c}+C':FC+FC+C=1:10₊₃ FC:CF+C=7₊₂:3₊₁ SumC=6.5 M:SumC=9:6.5 F%:35
W%:45 D%:55 W:M=17:9 H+A:Hd+Ad=24:3 A%:54 P:4 Succession: Orderly
FL:1.3 FLw:1.85 Most-liked: X (不気味で楽しくて) Most-diskiked: IX, VI (猫とも何とも
つかない), IV (鼠の死骸もいや).

2. 解 釈

(1) 運動反応

M:9₊₁ というのは R:38 から考えてまずまずの所である。内的資質が豊かであり、自分なりの世界の持ち主と考えてよい。運動反応の解釈仮説についてここであらためて記述する余裕はないが、もともと静的な図版に運動を感じとること、かつ、それが一種の内的な運動感覚に基づいているということから、内的な実感に基づいて外界を再構成する力の指標とみなされている。そうした世界が客観的世界に十分対応しうるためにはかなりのエネルギーが必要とされ、豊かな内的資質ないし相当な自我の強さが考えられる。もっとも、それが客観世界との対応を失うと、恣意的な空想世界への落ちこみになるから、たえず形体水準の良否を確かめねばならないのだが。とくに人間運動反応のMは、そのような主観的体験がどれだけ客観的に通用するかについての自信を反映している、と考えてもよい。Rが40前後ならば、おとなの場合少なくとも3つぐらいのMのあるのが望ましい。その点この被験者は平均以上の力に恵まれていることになる。

ただし、IIカードの第2, 第3反応, VIIカードの3つの反応は、運動の主要部分である体の部分がそれぞれ共通に使用されている。VIIカードの場合、質疑のやりようによっては反応数が1つになったかもしれない。だから M:9₊₁ を額面通りにうけとめることはできない。IIカードの場合、第1反応は未分化な血液反応であった。初発反応時間も長くなっており、いわゆるカラーショックがあったものと思われる。ただし、第2反応のMが、カラー部分を避けたD部分に対してなされており、それがかなり良質の反応であることは指摘しておきたい。つまり、カラーに動揺してもそこから立ち直る力がこの被験者にはある。一種の自我喪失体験に対して、内部エネルギーを動員することで対抗しているのである。しかし、そこであらためて赤色部分に立ち向かうためには、せっ角の姿勢をなかなか崩すことができない。そのため第3反応では D₂ の鳥の頭を熊の踊りに結びつける無理が生じる。つまり、D₃ だけでみる踊りと、それに D₂ のつけ加わった場合、単に部分がつけ加わるというより以上に、全体のゲシュタルトが変わるのである。この反応にはそれがなく、それだけ主観的な連想のプロセスと客観的な吟味のプロセスの相互作用

(Rapaport 1972) がスムーズではない。したがって反応の独立性はかなり損われており、それ自体はかなりよい反応でありながら、一種のくり返し反応になっている。ただし第4反応では D_1 で独立した反応を出せているから、徐々に立ち直っているわけである。

この傾向は、Ⅶカードの3つの反応で一そう顕著になる。これらは D_3 の部分を順番に象、女の子、猿の顔に見て、 D_1, D_2 の部分はいずれも羽織袴で踊っている体としている。その間鼠と猫の手の言及があるが、質疑が不十分で反応としてどうとりあげるかが難しい。いずれにしろ、踊りという知覚がまず成立するのだが細部を見てゆくにつれて新しい知覚が生じてくる。そして第2反応の女の子では、袴はスカートになりかける。つまり全体のゲシュタルトが変化して独立した新しい反応になりかける。しかしやっぱり袴に戻るのである。途中、女の子の手の部分 (d_2) が猫の手にみえるが、それを独立した反応とするのか、猫の手をした女の子とするのかはあいまいなままである。女の子と手というゲシュタルトが生じると、手の部分が何の手に見えてもあまり気にしない所がある。しかし猫の手をした人間の女の子というイメージに何の疑問も感じない——とくに説明する必要を感じない——とすれば、これはかなりアブノーマルな反応である。確かに質疑に問題があり、象の踊りが女の子の踊りに修正される——その場合は反応は一つになる——可能性があるとは筆者は考えているが、むしろ、こうした質疑だったからこそ異常性が赤裸々になったといえなくもない。

第3反応は猿の顔であるが、第1、第2と違って顔だけは向いあっている。だから D_3 に限って言えば、被験者は次々と新しい見方を発見しているのである。それに応じて、 D_1, D_2 の見方、むしろ全体のゲシュタルトも変わるはずであることはすでに述べた。被験者の場合、しかしそれが変わらない。最初の全体的印象が成立すると、その後次第に見えてくる部分はすべてそれに組みこまれてしまい、それ自体で独立した意味をもたなくなってしまう。あるいは、新しい部分の知覚がはじめの全体的直観を一そう精緻なものとし、それで反応の修正がなされることもない。その結果、反応数は増えるけれども、基本部分は同じままのややグロテスクな集積が生ずる。すでに述べたように、これは連想過程と吟味過程、直観と感覚のスムーズな相互作用が何らかの理由で阻害されているからである。Ⅶカードは母親カードといわれている。 D_3 部分は何であれ、全体を羽織袴の踊りとしてしまわねばならぬ心的事情が、この被験者にはあったのかもしれない。

しかし以上の反応パターンは、必ずしもM反応ないしⅡカード、Ⅶカードにとどまるものではない。たとえばⅠカードの第1反応にすでに現われている。これをWで魔女というのは必ずしも異常な反応ではないが、 d_5 について、これを頭とみるか首とみるかで魔女が2人にも1人にもなるという。当然1人の場合は正面像、2人の場合は横からということになる。しかし、そのことについての言及はまったくなく、 d_5 の見方だけがうんぬんされている。 d_5 をこれだけで頭とも首ともみるのは、やや無理な感じである。頭とみるにはやはり手としての d_3 との対応、さらには羽や足としての D_2 との関係づけが不可欠であろう。同様に、首とみるためにも D_1 との対応

があったはずである。しかし、一たんWとしての意味づけが成立すると、それは一種の聖域となり d₅ だけで頭でもあり首でもあるとして、2つの反応に分ける意図は認められない。これはコンタミネーションに近い反応であり、Ⅶカードの猫の手と同じ異常な反応である。

似たような反応はもう一つあり、Xカードの第2反応の青い妖怪と第6反応の扇子又は妖怪との結びつきがそれである。これも又 D₁ と D₁₃ をセットとして組みこんでしまい、D₁₂ が扇子にみえたり妖怪にみえたりするのに構いなく、不変の D₁ と結びつけてしまうのである。もっともこのカードについては、被験者がかなりリラックスしているので、Klopfer (1962) のいう poetic licence といったことが考えられないでもない。しかし、この種の反応がこのカードにとどまらないし、またかりにそうだとすると、この被験者に同じような異常反応の出やすいことは否定できない。

もっともⅢカードの第1反応は、これもMであるがはじめの土人が鳥人間に変わっている。d₂ の部分が鳥に見え、それと共に全体の意味づけがはじめの土人から新しくなっているのである。だから最初の直観的知覚と吟味の段階が必ずしもつねにスムーズに交流せぬというわけではない。また、Vカードの2つの反応も、やや質疑に誘導されてはいるが、一応独立の2つの反応に分けることができた。蝶と悪魔を一緒にするにしろ、蝶よりも悪魔ということになったにしろ、一つの反応になったかもしれない。

以上、この被験者のいくつかの反応に共通した異常のあることを述べてきた。それは直観的・主観的の把握が客観的な現実吟味能力を上回る可能性を示唆している。とくにそれらが多くM反応との関連で生じていることは、その傾向の一そう大きいことを思わせる。しかし歪曲の程度はそれ程目立ったものではなく、何らかの防衛反応とみなしてよい節がある。しかし、この被験者のM反応については、さらに考えておかねばならないことがあるのである。それは主反応9つのうち、Aと対応するものが4、(A) とが2、(H) とが1で、通常のHと結びついているのは2つしかないことである。

運動反応は、はじめにも少しふれたように、内的な運動感覚に基づいて生ずることになっている。しかし、それが人間の形で知覚される——つまりMの——場合は、その感覚が人間レベルのものと感じられており、それだけ ego-syntonic、ないしは自分のものとしてうけとめられている。しかし動物の形で知覚される場合、内的な感覚として感じられていながら、ego-alien なため外界に投影されやすいのである。それだけ意識から遠いのだが、いわゆる相貌的知覚はそこに由来しているし、活気のある世界との関係性もそれに基づいている。それらについては以前に考察したことがある（氏原1982）。ところで決定因はMでありながら内容がAである場合、どういうことが考えられるのであろうか。

一つには、今まで外界のものとしてうけとめられていたものが内的なものに変わってゆく、発達の的に言えば、FM からMへの過渡的現象として考えることができよう。しかしこの被験者は30才の成人であるし、M-A の対応がいかに多い。やはりこの人のかなり安定した知覚のパターン

としてみる方がよさそうである。そしてそれは、相貌的知覚と内的実感との混合した経験の仕方、いわゆる神秘的関与に対応しているのではなかろうか。これは、ある種の状況で、自分が何かに動かされているのか自ら動いているのかわからないような状態をいう。自我境界があいまいになりそのまま世界との一体感を経験するような状態である。ここで運動の内容が踊りであることが興味深い。とくにⅡカードの場合は、そのものずばりの神への儀式としての踊りである。踊りはもともと神との交歓の手だてであった。ほとんどの場合、何者かが踊り手にのりうつる。したがって踊り手は人でありながら神であり、神でありながら人であった。それだけに、そのためには厳密な手続きないし手順が必要であった。人間が神をうけ入れるには、それだけの用意をしなければならなかったのである。おそらくこの被験者には、何らかの超越的、ないし宗教的経験への素質がある。あるいはすでにそうした経験の持ち主であるかもしれない。これは一方ではより根源的なものとのつながりとして、この人の素晴らしい直観の源泉となる。それが心理臨床家としての一つの強味になることは間違いない。クライアントに対する同一視およびそれに伴う共感能力の高さが考えられる。しかし他方、自他未分化な混乱状態、あるいは根源的なものとの同一視からくる一種の思い上り、いずれにしても自我の手にはおえない状態に落ちこむ危険性が多分にある。すでにみたこの人の直観的な思いこみの強さ、時にそれが現実吟味能力と協応しないのも、こうしたこの人の素質と関連しているかもしれない。

M-(A) の組合せはXカードの第1、第4反応である。このカードは妖怪の饗宴で、たくさんの妖怪たちが踊っているという。妖怪とは何かはにわかに決めたいが、動物が否定的な形で人間のようにふるまう時、われわれはそれを妖怪と呼ぶのではないか。肯定的な場合はたとえばディズニーのまんがにみられる動物たちが考えられる。いずれしろ、動物が人間と同じように口をきいたり2本足で歩いたりするのは、そのままM-Aの組合せに対応している。ただ妖怪という分類は、その不自然さを空想的レベルで納得しようとする事だから、これを前述の poetic licence と考えることはできよう。一種の遊び、いわゆる自我に支えられた退行 (Kris, 1967) とみてよいかもしれない。このカードが、被験者によって一番好きなカードに選ばれているのはそのためであろう。ただし、より根源的なものといっても、この人がその明るい面よりは暗い面に親近感をもっているらしいことは心に留めておく必要がある。

次に M-(H) の組合せとして、Ⅲカードの第1反応鳥人間がある。これも一種の妖怪で、したがって (A) と分類してよいかもしれない。妖怪とは人間より低次の存在のようであるが、時に人間には及びもつかぬ力を発揮し、むしろ神に近い側面をもつ。その点 (H) も (A) も超人的という共通点を持ち、いわゆるより大なるものに近いのである。ところでこの反応の運動内容は、骨盤の臼による餅つきである。それだけですでに魔女的な意味を含むけれども、骨盤を性反応と考えるとよいという見解 (Klopfer 1962) も考えておかねばならない。また、餅つきはそのまま変容のプロセスである。だからここで感じられているのは一種のおこもり、一粒一粒が解体してより大きな合体に至る胎内的プロセスである。しかも、アフリカ土人→鳥人間への変化は、被

験者にとってこのプロセスが価値的にはより低次への移行と感じられているからであろう。言及はされていないけれども、アフリカということも黒から暗さを連想させるし、「おっばいが出ている」と言いながら、とくに女とは意識していなかったのも、女性的なものに対する何らかの抵抗があったと考えてよい。これらは一見否定的に感じられているだけに、いわば影のプロセスなのだが、被験者にはそれとなく親近感があり、赤色部分の不気味さとあいまって、この人が心のより深い部分とつながっていることを示している。II-2の熊の小父さんを父性的とすれば、この鳥人間やI-1の魔女は母性的側面を表わしている。

(2) 色彩反応

色彩反応はFC:7₊₂, CF:3₊₁で量的には問題がない。FC:CF+Cの比率もまあまあであるし、M:SumCも良好である。対人関係はスムーズとくにひっこみ思案でもなければ感情が暴発することもない。しかし運動反応の場合と同様、しさいに検討することかなりの問題が隠されている。

まず、FC:7₊₂のうち5₊₂がXカードに出ている。スコアリングの所でふれたように、これを色彩反応としてスコアしないことも考えられる。それと、妖怪にはいろんな形のものがあるから、とくに芋虫妖怪(第5反応)などと呼ばれない限り不定形とみなすべきであろう。どんな形体であろうと、妖怪といわれれば形体的におかしいとはいえない。だからこれらのFCのうちいくつかは、むしろCFとスコアした方がよいとも考えられる。目や口や角などの指摘から一応FCとスコアされてあるにすぎない。だから、対人関係における豊かな反応性やコントロールのきいた態度は、みかけよりもかなり割りびいて考える必要がある。

とくに第3反応のFC-は、赤いから女王という説明になっている。これは、赤いから情熱といったCsymではない。または、黒いから悪魔というのとも違う。結局反応とは図版刺激からの連想である。しかし反応が正しくあるためには、連想は図版のもつ属性とのかかわりで吟味されねばならない。もし合わなければ反応としては捨てられる。ロールシャッハテストとは、図版をみて何を思いついたかよりも、何を反応したかについて考えるものである。(I)でIIカード、VIIカードの運動反応について疑問を呈したのはそれに由来している。直観的な連想と連想をつなぐ吟味のプロセス(Rapaport, 1972)が弱いのである。赤いから女王というつながりは、もちろんこの人にとっては必然的なものなのだが、それを客観的なものにおき代える作業が要る。そのできない場合、反応としては捨てることがなければならない。赤を女王という形体に結びつけた限りでは——たとえば赤い服の女王——、この部分が女性とみられることは時々あるのでFCとスコアされるべきであろうが、赤いから女王というだけでは、マイナスの明細化とみなければならない。色彩刺激にさらされた場合、主観的な思いこみが勝って現実吟味能力がかなり低下するのである。Xカードでは第6反応がやはり-0.5であるが、それについてはすでに(I)で説明した。

この人のFCは、他にIIIカードの第3反応とIXカードの第1反応がある。IIIカードにはD₁を赤い蝶としたもので、Pでもあり形体的に問題はない。しかし赤いので不気味という発言がある。

その結果スコアリングは FCsym となった。しかし赤い色に触発されて主観的な連想の出てくる場所は、Xカードの第3反応と変わらない。赤に対する感受性が鋭い、または抵抗力が弱い、と考えることができる。

IXカードのFCは主に赤い服から来ている。付加のF/Cは赤い頭をもつ面による。かなり不自然な反応で、被験者自身グロテスクな仮面と述べている。赤い服を、華やか、気位の高い貴婦人の服というのは、赤いから女王にやや近い。このカードには色彩だけでなく陰影も含まれており、いろんな意味で最も反応しにくいカードといわれている。だから反応に現われる若干の無理を、色彩だけのせいにはできない。それにもかかわらず、このカードの色彩と形体とを何とか結びつけようとする、それはそのまま直観的連想の客観化、現実吟味の努力の表われであるが、それがもう一つうまくいったという感じに欠けている。

さらにCFについてみると、まずIIカードの第1反応は血がパーッと散っているというもので、mを伴っている。殺人現場の跡でという説明があるが、ほとんど純粹色彩反応の感じである。反応に13秒かかるとかなりの動揺のあったことを思わせるが、その結果はほとんど自我のかかわることのない未分化な内容である。mによる不安のしるしはこの場合むしろ望ましい。それだけおびやかされている自我の存在の証しになるからである。ただしその後で、(1)に述べた問題はあるにしろ質のよいM反応を出し、最後にはD₁に対して色とかかわりのないPレベルの反応を出している。だから回復能力はあるのである。

次のCFはIIIカードの第2反応火の玉である。質疑段階では妖怪、ささやきかけている、という。妖怪に超越的な意味のあることはすでに述べた。火の玉も、火というよりは霊とみなすべきであろう。それが弱い形ではあるが餅をつく鳥人間の反応に結びついている。II-1と同じく、CFではあるがMということで何らかの自我のコントロールはあり、土人—鳥人間という女性々に対する否定的な感じと共に、変容に対する期待を育くんでいるかにみえる。次のVIIIカードの第5反応は汚れた花である。この人は色彩カード以外ではDを出していない。色彩がないと、より抽象的・全体的把握が可能なのであろう。この反応は、最初の全彩色カードで4つのDを出した後のWである。一応場面に馴れたためと考えておく。ここで見逃すことのできないのが、IXカードの第3反応の付加決定因としてのCFである。これはブワーッと炎が吹き出しているという内容で、mFを主反応にとっているが、実はどちらともいいにくいところがある。II-1と同様にmがかかっているけれども、対人関係の文脈でかなり未分化で衝動的に動かされやすいのではないか。そういう時この人は、一種の無力感に捉えられるのであろう。それが超越的なものとかかわってある種の安心感が得られると、III-2のように、ある程度の不気味さを伴いながら ego-syntonic な感じになるのであろう。

(3) 陰影反応

この人の陰影反応は $F_c:1_{+1}$ である。黑白反応を入れても $FC':1_{+1}$ が追加されるにとどまる。F:F_c+FKの比率は1/4以下であり、Klopfer (1962) によれば愛情ないし依存欲求が極度に

抑えられているか病的に未発達，ということになる．ところで主反応としての Fc は VI カードの第 1 反応である．15 秒かかっており若干の動揺が認められる．内容はつぶされた猫である．猫がこの人にとって何を意味するのかは不明だが，つぶされたという感じにはかなりの被害感がある．愛情欲求に対するアンビバレントな姿勢が考えられる．依存性が他者に対する信頼感に通じていることは，今までに何度か論じたことがある（たとえば氏原 1982）．Fc+FK の数の少なさから，この被験者の他人に対する信頼感がそれ程豊かであるとは考えられない．しかし反応内容から考えると，それは傷つきへの怖れに由来しているように思われる．

そこで VI カードと共に陰影カードとして知られている VI カードの反応をみると，第 1 反応は F であるが，鼠の解剖で，VI カードの第 1 反応と奇妙に似ているのである．めったにしないカード回転をここでやっているのも，一つの回避行動であったかもしれない．おそらく被験者は陰影を感じており，それが開かれた鼠というやはり被害的な反応につながったのであろう．さらに，第 2 反応の海牛にも陰影の影響している可能性があり，モゾモゾ動く不気味な虫というのは，被験者の心の底にうごめいている依存欲求が否定的に感じとられていると考えてもよい．

さらに注目すべきことは，陰影と直接関係はないけれども，X カードで女王にダダそこねている妖怪と女王にとりついている赤ちゃんという反応のあることである．これは明らかに母性に対する依存感情を示している．材質的，したがって感覚的にはアンビバレントな依存感情が，ここでは甘えとしてうけ入れられているわけである．ただ，このカードが妖怪の饗宴であることを見逃すことはできない．すでに述べたように，被験者は好きなカードとして X カードを選び，不気味で楽しくてと述べている．いわゆる poetic licence，つまり意識的に自我のコントロールを弱めて遊んでいるような所がある．そこに超越的なものとのかかわりが生じ，自我喪失の不安はありながら，より大きいものとの一体感の中で一種の陶醉感を味わうことが可能になる．いわば日常的な世界に非日常的なものの侵入を許し，それが逆に日常生活に活気をもたらすわけである．もちろんそれが常にプラスに作用する保証はなく，この被験者についていえば，I-1 のマイナス反応は，そうした傾向が時に，現実吟味能力を著しく低下させうることを示している．

いずれにせよ，この人に十分な依存感情ないし対人的な信頼感のあることは明らかである．ということは，人生のごく初期における母子関係には問題がなかったのであろう．しかし，いつの頃からかそこに否定的な要素が入りこんだものらしい．そのへんの経緯はここテストでは明らかにできないが，III-1，IX-1，X-3 などに現われる女性像は，この人の母性的なものへの愛情欲求に対するアンビバレントな態度を反映している．III-1，X-3 についてはすでにのべたので IX カードの第 1 反応についていえば，角のある怪物の女性から凄惨なグロテスクな仮面をかぶった気位の高い貴婦人へ変わっている．物凄顔つきを仮面とすることによって，怖るべき女性像を避けたのではないか．このカードが一番嫌いなカードとして選ばれているのは示唆的である．女性に対する不可解で否定的な感情がもろに出ている．

IV カードと VI カードが嫌いなカードとされているのは，以上述べてきたような愛情欲求へのア

ンビバレンツが、この人の不安感情をかき立てるからであろう。なお父性的イメージについては、IIカードの神の儀式をとり行う熊の小父さん、Xカードの妖怪全体が集って王様の顔という反応が注目される。母性と同じく、超越的レベルではむしろ肯定的意味あいが強いのであろう。

(4) 所 見

この被験者の特徴は、外界と内界、現実と非現実の境界のあいまいなことである。それだけに、必ずしも現実にこだわらぬ柔軟性があり、超越的でやや宗教的なニュアンスをおびるが創造性に富んでいる。他者とのかかわりにおいても、比較的容易に相手と一体化するところがあり、心理治療家としては一つの強味になっている。しかし同時に、ややもすれば主観的空想的世界に入りこんで、現実場面での対応が不十分になることがある。たとえば、基本的安定感に欠けるわけではないのだが、現実場面では容易に人を信じることができず、親しい関係を結ぶことに強いアンビバレンツがある。とくに依存感情が被害感と結びついており、母性的イメージをめぐって現実吟味能力のかなり損われることがありうる。しかしいわゆる治療的關係では、それがクライエントの傷つきやすさに対する感受性の強さとして表われ、かなりの効果をあげるかもしれない。ただしそれらは、いわばおのれの弱さによって勝負するやり方であるので、時には思わぬ失敗につながる危険性がある。心理治療家としては得難い資質の持ち主にはちがいないが、より現実的な方向性をつねに見失わぬこと、現実場面についていえば、他者に対する一そうの信頼感を養うことが、この人の今後の課題と思われる。

おわりに

30才の臨床心理学専攻男子大学院生のロールシャッハテストの解釈例を示した。ただし筆者の通常手順とやや異なるところがあるので、それについて一言しておく。

まず、本例では継起分所をまったくしていない。また、ふつうはそれと平行して行う内容分所はかなりはしょった形で量的分所に組みこんである。さらに、いくつかのデータはまったくとり上げることがしなかった。一つには紙数の都合と、もう一つには被験者がいわゆる臨床ケースではなく、解釈のねらいも臨床家としての資質を評定することであったためである。もちろん、その場合でも全体としてのパーソナリティについて考察することは不可欠であるし、ある種の解釈手順だけが唯一最善のものではなく、したがって本例のようなやり方が不十分なやり方だという意味ではない。

文 献

- Klopf er, B. et al 1962 Developments in the Rorschach Technique vol. I. Harcourt, Brace & World.
Kris, E. 1967 Psychoanalytic Explorations in Art Shocken Books.
Rapaport, D. et al 1972 Diagnostic Psychological Testing International University Press
氏原 寛 1982 11才の少女のロールシャッハテストの解釈, 大阪外大学報, vol. 55, 77~93.